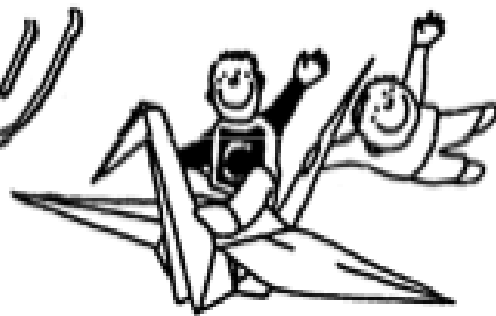


ジュラーヴリ

ЖУРАВЛЬ



～自主上映とお話の集い～

アニメーション：浪江消防団物語「無念」

お 話：「絶対安全」はない！原発事故を体験して
岡 洋子さん（浪江まち物語伝え隊）

《プログラム》

開場 : 1 時
集い開始 : 1 時 15 分
第 1 回上映 : 1 時 20 分～2 時 15 分
お話 : 2 時 30 分～3 時 30 分
第 2 回上映 : 3 時 40 分～4 時 35 分
集い終了 : 4 時 45 分



《入場料》

一般：1000 円 避難者・障がい者・大学生：500 円 高校生以下無料
(賛同いただいた方は入場料は無料です)

2017 年10月1日(日)1時15分～4時45分

弁天町 ORC200 生涯学習センター(講堂)

弁天町駅 (JR 環状線・北口、地下鉄中央線・西口) から ORC
(オーク) 200 への通路を通り、中央エレベーターで 7 階へ

主催：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

問合せ：072 - 253 - 4644 (いのまた) 0797 - 74 - 6091 (たなか)

e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp



4月30日に行われた「チェルノブイリ 31 周年」の集いでは、この「無念」の紙芝居をデビューしたての「劇団ふたり（小林美香さん、長沢由美さん）」が上演しました。救えたかもしれない命！津波被害者の救助活動を、フクシマ事故の放射能汚染の為に中断せざるを得なかった無念！二人の熱演も相まって、見る者、聴く者の胸に強く迫り、揺り動かしました。

今回の企画も、この紙芝居の企画と同時にあたためていたものです。今回はアニメーション上映と、さらに岡洋子さんからお話「『絶対安全はない！』原発事故を体験して」を伺います。岡さんは浪江町で農業を営むかたわら浪江町婦人消防隊として活動されていました。事故後は福島市で避難生活を続けられています。その体験と想いを語っていただきます。

福島事故から6年半が経ちましたが汚染水問題は解決せず、廃炉の道筋は見え、放射能汚染は続き、問題は山積したままです。そんな中で、まるで事故は終わったかのように年20mSvの被ばく基準で避難指示が解除されて帰還が進められています。その一方で被害者への支援が打ち切れつつあります。改めて事故当時とその後の避難生活を振り返り、フクシマ事故がもたらした被害とその犠牲に思いをいたしたいと思います。そしてフクシマ事故を繰り返さないために皆さんと共に取り組んでいきたいと思います。

関西では初の上映会です。多くの方の参加をお待ちしています！（詳しくはチラシ参照）

「集い」に賛同とご協力をお願いいたします！！

賛同カンパ 個人：1000円（1口） 団体：2000円（1口） 多数口大歓迎！

（賛同いただいた方は当日の入場料は無料です。）

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

（2017.6.19～2017.9.3）

寺本和泉 馬庭京子 中村愛恵 田原良二 田坂富士夫 相沢一正 原発の危険性を考える宝塚の会
中川慶子 宗泉寺・旦保立子 染木富美代 加堂妙子 久保田洋一・いくよ 折口晴夫 いなだ多恵
子 根本がん 川原重信 高木祥吾 稲田みどり 森本良子 富田洋香 森重子 庄田政江 谷田部
裕子 堀口眞也 鈴木満喜子 泉迪子 馬庭京子 御堂義之 田岡ひろみ 村田三郎 藤井学昭
齊藤充子 三原翠 若木妙子 鹿間桂子 田中章子 石地優 川辺比呂子 梅原桂子 林みどり

（順不同・敬称略）

チェルノブイリ事故31年目の現地訪問・報告-その2

報告：振津かつみ

前号のジュラーヴリ 109 号に引き続き、今年4月の「現地訪問報告-連載その2」です。今回は、ミンスクの「移住者の会」、汚染地クラスノポーリエとチェリコフでの交流の様子についてご報告します。

「移住者の会」のメンバーとの交流

4月15日の昼に成田を発って、ロシアのモスクワ空港で乗り継ぎ、同日夜にはベラルーシのミンスクに到着。ミンスクでは、「移住者の会」代表のジャンナさんのアパートに二日間ホームステイをさせていただきました。ちょうどロシア正教で「パスハ」と呼ばれる「復活祭」のお祭の時期だったので、殻を赤く染めた卵や、クリーチという菓子パンのようなケーキなど、ジャンナさんが御ちそうを並べて迎えてくれました。



「移住者の会」の活動を通じて人々に届けられている私たちの支援

ジャンナさんは、この一年間の「移住者の会」の活動をいろいろと話してくれました。「移住者の会」で、病気や障がいのあるメンバーを訪問したり、小さい子どもがいて経済的にも困っている家庭に支援をしたりしているとのこと。昨年の私たちの支援カンパで、ベビーフード（16人に400gを計148箱）、子供用紙おむつ（12人に86個入りを3パックずつ）、「寝たきり」の人に大人用紙おむつ（15人に30個入り計63パック）を購入して配ったそうです。また、11人に菓代



卵の殻を互いに当て、割れなかった方に幸運が来るとか…

（5ドルずつ）の支援をしたそうです。紙おむつは1パック（米ドルに換算して）18ドルほどですが、一般的な家庭の月給が200-250ドル（共稼ぎで400-500ドル）ですから、このような支援も家計の助けになっているようです。私たちのささやかな資金カンパも、ジャンナさんたち「移住者の会」の日々の活動を通じて、必要とされている人々に届けられている様子がうかがえました。

ジャンナさんの話しだと、毎月収入の20-25%は光熱費や電話代などにかかり、残りは食費や薬代、等々で消え、貯金などはないとのこと。（ちなみに、ジャンナさんの年金は月140ドル、息子のパーベルくんの「チェルノブイリ身体障がい者年金」が月200ドルだそうです。）しかし、社会主義ソ連の時代からの「遺産」として、公的医療機関での医療（薬代は別）はチェルノブイリ被害者に限らず無料なので、この点は日本と大きく違います。今は、有料の私的医療機関もありますが「私的医療機関は、収益をあげようとするために、何度も検査したりする…」とジャンナさんは話していました。

「移住者」としてチェルノブイリ事故の被害体験を語る活動

毎年、4月26日前後の「チェルノブイリ週間」には、ベラルーシ各地でチェルノブイリ事故被害者を祈念する様々な行事が催されます。しかし、「強権的」なルカシェンコ大統領の政権下で原

発建設を進めているベラルーシでは、チェルノブイリ被害を経験し、被害者の苦悩が続いているにもかかわらず、国民が公に政府の原発推進策に異を唱えることはなかなかできません。そんな中、昨年の「チェルノブイリ週間」には、「移住者の会」のメンバーが集まって、小さな（非公開の）「交流会」をしたそうです。（公に「市民集会」を持つ事は、なかなかできない政治状況です。）そこでは、一年間に主に欧州の国々の団体などの招聘で、チェルノブイリ事故の体験を語る活動をしたメンバーが、それぞれの講演・交流ツアーの内容を紹介し、訪問先で交流した人々が原発についてどのような意見を持っていたかなど報告し、情報共有して話し合ったそうです。「移住者の会」の皆さんにとって、日本の私たちも含め、他の国の市民との交流が、チェルノブイリ被害者としての自分たちの「国際的役割」を確認し、また自国の状況を他国と比較して評価しながら活動が続けていくためにも重要な契機になっていることを感じました。

ジャンナさんは、最近、ゴメリ州のオクチャブリという街の学校で「チェルノブイリ事故による移住者」としての体験を子どもたちに話す機会があったそうです。国外に何度も招聘されて体験を話しているジャンナさんですが、ベラルーシ国内の学校での講演は、意外にも今回が初めてだったそうです。私は「31年後に初めて?!」と、驚きました。ベラルーシでは「移住者は汚染地に暮らしているわけではないのだから、もう被害者ではないでしょう」というように考えている人も多いそうです。（政府の「移住者」への支援策も次第に削減され、今ではほとんどない。）今回は、ドイツの団体（緑の党?）が支援している学校で、その団体が企画した催しだったそうです。

ジャンナさんは、私たちを故郷ナローブリアに案内した後、今年も4月20日から「チェルノブイリ事故の日」を含む約10日間、ドイツに招聘され、各地で体験を話される予定とのことで、休む間もなく精力的に活動されていました。

若い世代の人々に活動をつないでゆきたい～ジャンナさんの思い

ジャンナさんは、昨年の「チェルノブイリ30年・フクシマ5年」に来日し、福島を訪問したり大阪での「国際シンポジウム」に参加したりする中で、今後のチェルノブイリとフクシマを結んだ活動についてもいろいろと考え始めているようです。「事故当時若かった私たちも、あれから30年経って歳を重ね、いつもまでも生きていられるわけではないでしょう。若い世代の人々にも活動に参加してもらって、つないでゆきたい…」と思いを話してくれました。そして、1986年の事故当時まだ子どもだった「移住者」で、今は母親になっている30代の女性たちに、「フクシマのお母さんたちと交流してみない。手紙を書いてもらえないかしら。」「日本の人たちは、チェルノブイリ事故後、私たちを支援してくれたでしょ。今度は、私たちが何か日本の友人たちの役に立ちたいの。」と、試みに声をかけしたところ、4人が手紙を書いてくれたそうです。「何を書いたらいいのかしら?」と若いお母さんたちに問われ、ジャンナさんは、「あなたたちはまだ小さかったので、事故当時のことはあまり覚えていないかもしれないけど、なんでも思い出せることを書いて。子どものことを心配して、お母さんがどんな様子だったとか。今は自分も母親になって、子どもを持って、改めて原発事故のことをどう思うかとか…」と、話したそうです。お手紙と写真を預かってきました。

「原発事故の被害は、ほんとうに長い時間のかかる問題です。福島で私が会った若いお母さんたちは、子どもたちの健康や、将来のこと、結婚のことなど、いろいろと心配していました。チェルノブイリ事故被害を経験した私たちがたどってきた経験を伝えることで、フクシマの人々も『未来』が見えるのではないのでしょうか。」と、ジャンナさんは話していました。また、いつもジャンナさんの活動を陰ながらサポートしてくれているジャンナさんの義娘（息子さんの嫁）も、「チェルノブイリ被災者の男性と結婚した者として、自分も何か協力したい」と言って手紙を書いてくれたそ

うです。「手紙」をきっかけに、チェルノブイリとフクシマの若い世代の人々との交流が始まることを期待し、私たちがチェルノブイリとフクシマの人々を繋いでゆく役割を担っていければと思います。

移住者のメンバーのお宅に招かれて

4月16日の日曜日は、「移住者の会」のメンバーのお宅に「パスハ」のお祝いの食事に招かれて出かけました。訪ねて行くと、1993年に「救援関西」の初めての「ベラルーシ訪問団」に参加した、福井の山崎隆敏さんがホームステイをさせて頂いたご家庭でした。24年前にはまだ幼かった3人の息子さんたちは、立派な大人になって、うち二人は結婚して子どもさんもいます。私たちが訪問するということで、お嫁さん、お孫さんも含めて集まって歓迎してくれました。24年前に山崎さんと一緒に撮影した写真を大切に持っておられ、見せてくれました。子どもたちの成長が、私たちと「移住者の会」の交流の年月を物語っているようです。

お母さんが腕によりをかけて作ってくれた御ちそうの並ぶテーブルを囲んで、話しがはずみました。息子さんたちは、日本のフクシマ事故のことにもとても関心を持っていました。「フクシマは、今、どうなっていますか」と、事故原発の廃炉作業のこと、被災地の人々の生活のことなどを心配して、いろいろ尋ねてくれました。ジャンナさんが、福島若き人たちとの「文通」のことを話すと、息子さんたちも「自分たちもやってみたい」と、メールアドレスを教えてくださいました。（そう、今は「文通」というより、電子メールやフェイス・ブックの時代ですね！特に若い人々は…）



1993年の訪問時。左端が山崎さん。山崎さんも若かった！



今年4月撮影。「パパ」になった息子さんたち！

汚染地クラスノポーリエとチェリコフ訪問

4月19～21日は、クラスノポーリエに滞在しました。19、20日はクラスノポーリエの学校やギムナジウム、ソヌチカ幼稚園、子ども・大人の障がい者センター、病院などを訪問しました。ベーラさんのお見舞いに、お宅にも寄りました。また、21日には、クラスノポーリエから日帰り北隣のチェリコフへ往復し、子どもたちの社会保護施設「プラレスカ」、コロソク幼稚園の訪問、そして5年前に亡くなったバーリャさんの墓参にも行きました。

クラスノポーリエ

子ども障がい者センター

「子ども障がい者センター」所長のナジェーダさんは、2年前に病気で倒れてしまった小児科医のベーラさんに代わって、今後の私たちのクラスノポーリエ支援・交流の「受け入れ担当」を引き受けて下さいました。今回は、初めてナジェーダさんのコーディネートで、クラスノポーリエの各施設を訪問しました。所長をされているナジェーダさんは、ベーラさんのように休暇まで取って私

たちをホームステイさせ、訪問の間ずっと付き添って各施設を案内するというわけにもいきません。私たちも25年間通ってきた、「勝手知ったるクラスノポリエ」ですので、宿泊した街の中心部の「ホテル」（古い学生寮のような…）を拠点に、ナジェーダさんがあらかじめアポを取ってくれた「訪問予定」に従って、自分たちで街中を散策しながら回りました（主に徒歩で、一部車送迎）。

「子ども障がい者センター」の建物は、昨年までは「プリユート」（子どものための社会的保護施設）と共同で使っていたのですが、その「プリユート」は閉鎖され、建物全体を「子ども障がい者センター」として使うようになったそうです。ベラルーシ政府は、親権を放棄・剥奪された家庭の子どもたちを、以前は宿泊施設もある「プリユート」でケアしていたのですが、最近では「里親制度」を推進し、各地の施設を次々と閉鎖しているようです。「里親」になった家庭には、住宅建設等の公的支援がされるとのこと。クラスノポリエにも、そのような家が2件あるそうです。



ナジェーダさん

同センターには、今、2km以内に住む21人の子どもたちが通っているそうです。送迎のマイクロバスも出しています。また、遠方の子どもたち5人には、訪問ケアも行っているそうです。ナジェーダさんにセンターを案内してもらいました。勉強部屋では、就学年齢の子どもたちが、指導員の先生たちと一緒に机を並べてそれぞれの課題に取り組んでいました。その他、運動部屋、ベットの並んだ「お昼寝」部屋、言語療法の部屋、着衣など日常の身の回りのことをできるように訓練する部屋、家族との面談・相談室、図書室など…建物全体を使って、様々な取り組みをされているようです。

子どもたちと職員で、私たちを歓迎して、歌と合奏、踊りをまじえた「おおかみと子羊」の劇を披露してくれました。笑顔一杯で歌い、踊る子どもたちの表情から、それぞれの子どもたちの個性と心身の発達にあわせて、子どもたちの生活力を育む教育がされていることが伝わってきました。



子どもたちの健康にも気を使っています。センターでは入園前だけでなく、年に1回、精神科、心理、小児科、神経科の医師や専門家が診察し、血液検査も毎年行っているそうです。看護師さんが常駐し、毎日、子どもたちの健康状態をチェックしています。

センターでは、今年の私たちの支援で、子どもたち部屋に敷く絨毯と部屋の改装に必要なペンキを購入したいとのことでした。

大人の障がい者センター

「大人障がい者センター」は、月曜から金曜日の朝8時から夕方5時まで、毎日通ってくることができる「ディサービス」のような施設です。街の「文化センター」（のような）建物の一室を使って運営しています。歌や踊り、寸劇の練習をしたり、職員と一緒に民芸品を作ったりしています。民芸品は、地域のイベントなどで販売して、センターの運営資金にもしているとのこと。同センターが開設されて今



年で6年目。このような活動を通じて、地域の人々にも、センターのことをより広く知ってもらいたいと所長さんは話していました。手作り民芸品の中には素敵なお土産になりそうな小品もあって、私たちの日本での救援バザーでも売れるかもしれない…と、相談したところ、次回訪問時までに試作品をいくつか作ってもらうことになりました。

センターでは、利用者さんが、できるだけ自立した生活を送れるように、調理などの家事の訓練を行うプロジェクトも始めたいと、別の部屋で準備中だそうです。このセンターでの活動に参加するようになって、自立し、結婚して、今では子どもができた人もいるとのこと。地道な活動を続け、広げながら、その努力が着実に実ってきているのを感じました。センターの開設当初から毎年、訪問している私たちには、もう顔なじみになっている利用者さんも何人かいて、歌やダンスを披露してもらった後、一緒にお茶をしながら短時間ですが楽しい時間を過ごしました。

今年の私たちの支援で、センターでは窓のブラインド、ペンキ、ゲーム、アイロン（自立生活の訓練にも使う）を購入したとのことでした。

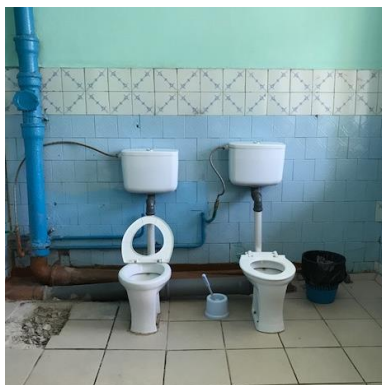
ソヌチカ幼稚園



ソヌチカ幼稚園でも、子どもたちが、かわいい歌とダンスを披露してくれました。お礼に松川さんが折り紙を子どもたちに手渡し、オリヅルを目の前で折ってあげると、子どもたちは興味津々。

幼稚園では、今年から入園までの「準備クラス」（二週間に1回1時間だけ）を試みに始めたそうで、5組の母子が参加したそうです。入園前に子どもたちの個性や課題を知り、またお母さんたちにも子どもの教育や成長に関心を持ってもらうということのようです。

幼稚園では、今年の私たちの支援で、子どもたちのトイレの間仕切りの工事をしたとのことでした。ベラルーシでは、今年から「新しい基準」ができて、幼稚園ではトイレは「個室」にすべきだとの通達が政府からあったそうです。幼稚園の先生方は、「国からいろいろと指示され、ちゃんと実行したかどうか監査にも来られるのだけど…いつも指示だけで、必要な予算が降りてこないのです。」と、どうしたものかと思案していたところだそうです。思わぬ「用途」に、資金カンパが役立ってよかった！です。



「仕切」のない従来のトイレ



「個室」に改修後

学校

学校の校長先生のタチアーナさんは、小児科医ベーラさんの活動のひとつを引き継ぎ、私たちが紹介したロシアのNGO「ラディミチ-チェルノブイリの子どもたちのために」と連絡を取って、クラスノポリエの子どもたちの「ノボ・キャンプ」での保養を担当してくれています。昨年のキャンプ参加者は、私たちの意向も汲んで、子どもの多い家庭や、片親の家庭などで、被災地から他の地

域への旅行に行く機会の少ない子どもたち5人を選んで下さったそうです。子どもたちは、ロシアなど他の地域から来た子どもたちとの交流や、様々なサークル活動などのプログラムがとても気に入ったようだったとのこと。

昨年の「チェルノブイリ30周年」の学校での取り組みについて聞いたところ、事故の起きた4月26日の始業前に「チェルノブイリを忘れないように」全校生徒と教職員で、被害者に対して黙祷を捧げたとのこと。（これは、国の「プログラム」として、チェルノブイリの日には、黙祷をするように…とされているそうです。）クラスノポリエはチェルノブイリ被災地なので、子どもたちは、甲状腺検診（今の子どもたちは事故のための放射性ヨウ素による被ばくはありませんが、ヨード不足地域ということもあり、甲状腺のチェックがされています）、ホールボディ・カウンターを含む健診を毎年受ける、給食は無料、年に1回の「保養」などの施策は今も続けられているとのこと。放射線や被ばく防護に関する教育は、高学年（日本の中高に相当）では年間8時間、低学年（小学校相当）でも4時間は行っているとのことでした。（ちなみに福島県の小中学校では年間2時間です。）

今年の資金カンパで、学校では、校庭の電動芝刈り機とドリル（校舎の修理用工具）を購入するとの話でした。

校長先生との話しの後、講堂で、高学年の生徒たちが「チェルノブイリ事故」をテーマにしたプレゼンテーションを披露してくれました。進行役の説明、朗読や歌を折り込み、パワーポイントのスライドやビデオ使って構成された30分余の「プレゼンテーション」で、子どもたちが自分たちで調べた「チェルノブイリ」を表現してくれました。内容の概略は、以下のようなものです。

「放射能は見えない敵だ。人々を守るために、英雄的なリクビダートル（事故処理にあたった消防士、兵士、労働者など）の献身的な仕事によって、被害は最小限に押さえられた。30km圏内は強制移住地となり、今も人が住めない。私たちの回りの草原や湖は、前と同じに見えるのに、使えないとは…。捨てられた村々の光景に心が痛む。草原、鳥…自然は、事故前は人々を楽しませてくれたのに。そこに「命」「生活」を取り戻すには、どうしたらいいか…今はわからない。

『チェルノブイリが終わった』という人がいるが、それは違う。事故を起こした4号炉の処理・管理は長期にわたる。チェルノブイリは悲劇だ。英雄的働きをした6人の？兵士（クラスノポリエ出身者？）に黙祷を捧げましょう。

事故後、日本から『救援関西』などの友人たちが支援に来てくれた。日本の人々は私たちの悲劇を理解してくれる。その日本で2011年にフクシマ事故が起こった…事故を過去のものにしないためには、忘れないことが重要だ。」

チェルノブイリ事故後に被災地クラスノポリエで生まれ育った子どもたちが、「チェルノブイリ」を「悲劇」として受け止め、「忘れてはならない」ことを学んでいることはよく伝わってきました。しかし、「見えない敵」の放射能をまき散らした人々（世界で核兵器や原発など、核利用を進める政府や原子力産業と、その協力者たち）がいることは、スッポリ抜けています（日本の管制の教育もそうですが…）。一方で、事故処理のために大量の被ばくをして命と健康を奪われたリクビダートルの方々を「英雄」とし、「被害者」とは決してとらえない…とい



子どもたちの絵



発表をしてくれた子どもたちとともに

うことが気になりました。（日本では、フクシマ事故処理作業者の人権を踏みにじる実態がありますので、また質的に違った意味で深刻ですが。）ベラルーシの政治状況を考えると、子どもたちのこのような受け止め方は仕方ないことです。

ということで、私は子どもたちへの「挨拶」の中で「私たちは、皆さんが生まれる前から、毎年クラスノポリエを訪れています。日本は広島・長崎の原爆被害を経験しました。また日本には多くの原発があり、チェルノブイリ被害を黙ってみていることはできなかったのです。私たちはベラルーシの皆さんとの交流で多くを学び、チェルノブイリを繰り返してはならないと訴えて来しました。しかし、残念ながらフクシマでチェルノブイリと同じような重大事故が起こってしまいました。『放射能は見えない敵』と皆さんは言われましたが、このような放射能をまき散らす核利用を始めたのは『人間』であって、『見えない』何者かではありません。人間が始めたことは、人間が終わらさなければなりません。」というようなことを話しました。チェルノブイリと同時に、フクシマをどう伝えていくか…という私たちの自身の課題も考えさせられました。

ギムナジウム

ベラルーシには、日本の小中学・高校を合わせた教育機関として「学校」と「ギムナジウム」があります。クラスノポリエにもごく近くに両方あって、子どもがどちらに通うかは、入学前に親が選択するようです。ギムナジウムの先生方の説明では、「ギムナジウムの方が『ステータス』が上で、より深く考える教育を行っている」のだとか。（外から見ている私たちには、それぞれの学校にユニークなところや優れた特徴があるように見え、どちらの「ステータス」が上…というような違いがよくわからないのですが。）

今年から校長先生がアンドレイ先生というクラスノポリエ出身の男性に変わりました。（昨年までの女性の先生は、そのまま同じ学校で勤務され



展示されているポスター

校内に展示してあるのチェルノブイリ事故と放射能汚染を説明するポスターなどを見せてくれました。

ギムナジウムでは、今年の私たちのカンパで「クラスノポリエには売っていない、素敵なボールを購入します」とのことで、後日、写真を送ってきてくれました。

校内に展示してあるのチェルノ



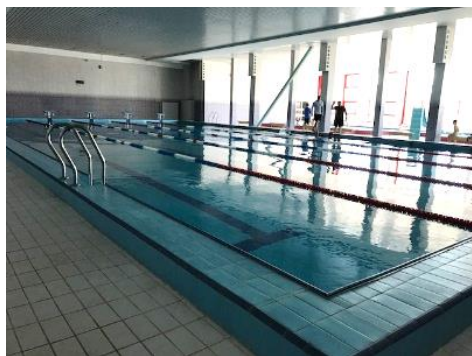
教育長さんの表敬訪問

私たちは、一昨年からは、クラスノポリエの教育委員会から「招聘状」を送ってもらって、ベラルーシ入国のために「人道ビザ」を取ることができるようになりました。（それまでは、ベーラさんをお願いして、病院から招聘状を出してもらっていた。）若い教育委員長のサーシャさんの私たちの活動への理解と、サーシャさんの「片腕」のバロージャさん（実は「子ども障がい者センター」のナジェーダさんの夫）のサポートのおかげです。それで、今回も御礼の挨拶に行きたいと表敬訪問を申し入れたところ、サーシャさんは休暇中にもかかわらず面会に応じて下さいました。そして、「救援関西」への額入りの感謝状まで頂きました。ベーラさんが長年にわたって私たちとの交流・支援の受け入れを頑張っておられたことが、クラスノポリエで市民権を得て、このような信頼関係を築くことに繋がったのを改めて感じました。

サーシャさんは、昨年の「チェルノブイリ 30 周年」には、モギレフ州やクラスノポリエ市でも、集会や展示等が行われたことを話してくれました。「私たち『被災者の存在』によって、チェルノブイリ事故があったことを示してゆきたいのです。チェルノブイリの被災地への施策プログラムは続けなければなりません。特に住民の健康問題は重要です。」と話していました。また、「事故前のクラスノポリエには、麻布、レンガ、パン、缶詰、精肉の工場があったが、事故後は閉鎖され、失業率はいまだに高い。頂いた感謝状
将来性があるのは林業くらいではないか。」と、30年経っても地域経済の「復興」がままならない実状を憂っていました。そんな中で、昨年やっと完成した立派な「スポーツセンター」は、「復興の目玉」のひとつのようで、「ぜひ、見学して行って下さい。」と、センターに連絡を取ってくれました。

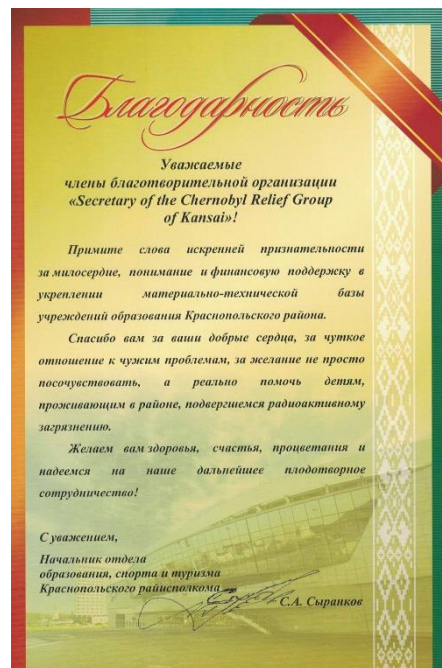
新しいスポーツセンター

新しい「スポーツセンター」は、街の中心近くにある、大きな二階建て鉄筋の建物です。入り口を入ると、日本のスポーツジムにもあるような「クロック」があります。一階には室内温水プールが二つ（競技用と子ども用）あり、二階にはハンドボールやバレーボールもできる大きなコートがあり、そこには 200 人の観客席もあります。最近、



ロシアのナショナル

チームが試合をしにきたのだそうです。別の部屋にはレスリングのリンク、様々な機具を備えたスポーツジムもあります。クラスノポリエの住民だけでなく、他の地域からも施設を利用しに来ること。その「経済効果」も期待できるのかな…と思いきや、「立派な設備を維持管理しながら、黒字経営をするのはそんなに簡単ではない」と、元は体育の教員だったという若い館長さんは頭を悩ましている様子でした。



(ちなみに、次回クラスノポリエを訪問する時には、必ず水着を持って行こう…と思います。「ホテル」のシャワーはいつもお湯が出るわけではなく、春先の寒い中でも「水シャワー」の苦行をしなければならないこともしばしば。「スポーツセンター」でひと泳ぎしてシャワーを使わせてもらえれば、ちょうどいいかな…と。)

チェリコフ

子どもたちの社会保護施設「プラレスカ」

前述のように、ベラルーシでは里親制度が勧められ、「プラレスカ」で子どもたちが寝泊まりして生活をするようなことは、今はありませんが、引き続き、子どもたちを養育することのできない家庭の子どもたちのケアや親の更正などの相談事業などを行っています。「プラレスカ」の所長のスベトラーナさんとはもう20年以上のお付き合いです。訪問すると、お茶を飲みながら「四方山話」に花が咲きました。チェリコフの市街地は、未だに $1\sim 5$ キュリー/ km^2 $=37,000\sim 185,000\text{Bq}/\text{m}^2$ のセシウム 137 の汚染レベルで、学校での給食は無料、年に1回の保養に行ける、大学では学生寮に入る権利がある、妊娠手当や3歳までの子どもへの手当が他の地域の2倍ある…などの話がありました。今年の支援カンパで、何を購入するかは、まだ決めていないとのことでした。



クラスノポリエからチェリコフに移動する途中の森の入り口には「放射能汚染管理区域」の立て札。キノコなど採取したら放射能を測定するように…と書いてある。

コロソク幼稚園



昼食にご馳走を準備してくれた園長先生

でも行きます。期間は3週間。」とのことで、(クラスノポリエでは、幼稚園は親同伴と聞いたので) 地域によって違うようです。

コロソク幼稚園では、今年の支援カンパで芝刈り機、おもちゃ、掃除機を購入したいとのことでした。

コロソク幼稚園では、料理上手な園長先生が、毎年、昼食に沢山の御ちそうを準備してもてなして下さいます。園長先生は、「地元で取れる作物は、放射能を測定し、よく洗って食べるようにしています。子どもたちの給食には特に気を使っています。ビタミンの豊富な物や、海藻や海の魚も週2回はメニューに入れるようにしています。牛乳は地元の物で、工場から直接にミルク缶に入れて運んでくれます。」と、話していました。(工場で、ちゃんと放射能の測定をしているということでしょう。) また、「チェリコフでは、幼稚園でも保養は必ずしも親

と同伴でなく



子ども達の部屋

チェルノブイリ事故緊急作業従事者の心血管疾患のリスクは 放射線被ばくによって明らかに増加している

チェルノブイリ事故直後の1986年6月、当時のソ連では、チェルノブイリ事故処理作業に従事した人々（リクビダートル）の登録システムが作られました。そのシステムを引き継いだ「ロシア国家放射線疫学登録」（NRER）では、ロシア在住またはロシアに住んでいたことのある194,000人のリクビダートルの医学的情報や被ばく量に関するデータが登録されています。

ロシア連邦保健省によるプロトコールでは、リクビダートルは毎年、又は2年ごとに健診を受けることが法的に義務づけられています。リクビダートルは、自分の居住区の医療機関でまず健診を受け、必要に応じて連邦レベルでの精密検査を受けます。健診データはNRERに登録され、2-3年かけて診断等を評価し、ICD-10(WHOの疾病分類1992)に従って診断名が確定されます。

被ばく量については、チェルノブイリ・ゾーン滞在中のガンマ線外部被ばくの個人蓄積線量を、個人及び集団線量の記録、または作業場の線量率から推定しています。（不確実性は、線量推定法と作業時間と場所によりますが、0.5-3倍の幅があります。）

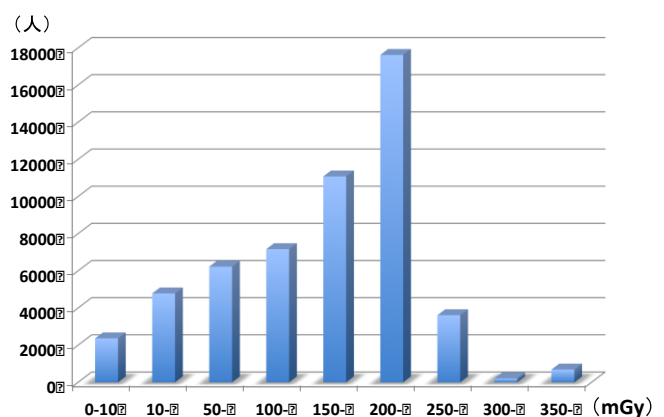
今年7月に、NRERに登録されているリクビダートルの心血管疾患の放射線リスクについての最新の報告が論文で発表されました（V.Kashcheev, V.Ivanov ほか、Health Physics, 2017 Jul;113(1):23-29. 2016年に発表されたリクビダートルの脳血管疾患の放射線リスクに関する論文に続く報告）。フクシマの事故処理作業者の健康管理や被ばくリスクを評価する上でも、また現行の「被ばく防護の基準」を批判的に検討する上でも重要な報告だと思いますので、以下にとりあえざるの概要をご紹介します。（振津）

調査対象者は、作業開始前にすでに心血管疾患と診断されていた者を除く53,772人です。被ばく時年齢は平均33歳。[調査対象者の選択：①男性作業員②外部ガンマ線量がわかっている人③調査期間に少なくとも一度は健康状態に関する情報がある人④事故後1年以内にチェルノブイリ・ゾーンに入域した人：1年以降の作業者に比べて約3倍多く被ばくし、おそらくより厳しい環境で作業した⑤入域前あるいは調査期間中に悪性新生物の診断を受けていない人]

個人線量は0.0001Gy～1.42Gy、平均全身外部被ばく線量は0.161Gyです。[約半数（53.4%）が0.15-0.25Gy、ほとんどの人（98.3%）は0.3Gyを超えない（超えるのは1.7%のみ）。図1]

1986-2012年の調査期間に行われた定期健康診断で、27,456件の心血管疾患を診断し、その放射線リスクと他の因子のリスクを解析しました。

図1.線量区分別のリクビダートルの人数分布

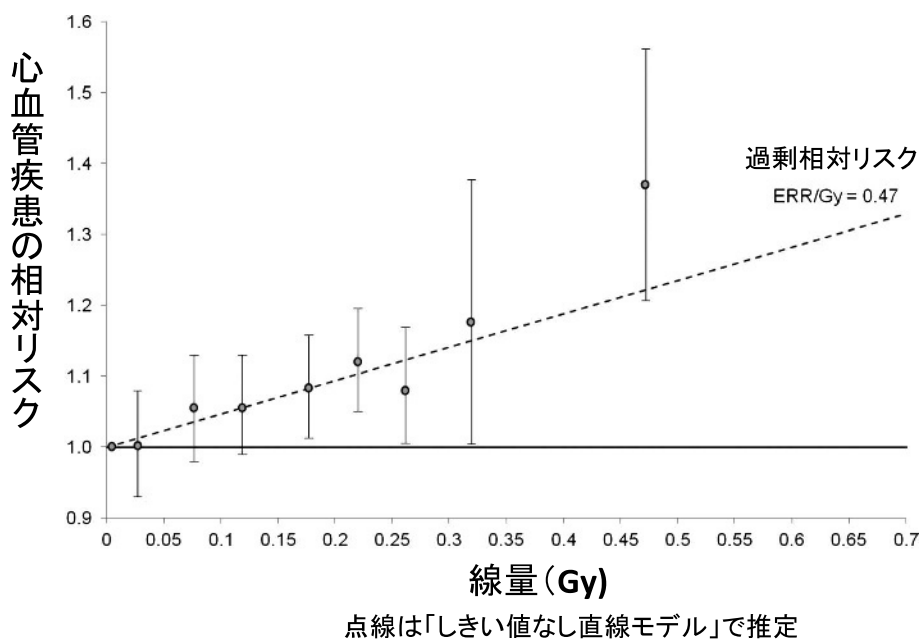


結論として以下が述べられています。

- ① ロシアのリクビダートルで、事故後1年以内に作業した人の心血管疾患罹患は、外部ガンマ線量（作業期間中の蓄積線量）に比例して統計的に有意に増加している。（図2）
- ② しきい値なし直線（LNT）モデルを用いて評価すると、心血管疾患の1 Gyあたりの過剰相対リスク(ERR/Gy)は0.47(95%信頼区間：0.31-0.67, $p < 0.001$)である。これは固形癌の放射線リスクにも匹敵する。心血管疾患については、潜伏期はない。[参考：男性原爆被爆者の調査では、ERR/Gy=0.07(95%信頼区間：-0.001-0.16)と報告されている。(Ozasa, 2012)]
- ③ 0.15Gy以上で、統計的に有意な放射線リスクが認められた。
- ④ ベースラインのリスクは合併疾患（糖尿病、高血圧、肥満、アルコール依存）で有意に上昇。
- ⑤ リスクはチェルノブイリ・ゾーンでの作業期間で有意に変化した。作業期間が6週間未満の作業者は統計的に有意な罹患の増加がみられた。12週間以上の作業者では有意ではなかった。[作業期間の長さによる、平均蓄積被ばく量の差はほとんどなかったが、線量率は6週間未満で桁違いに高かった（1日あたりの平均被ばく量：6週間未満で20mGy/d、12週間以上で1.5mGy/d）。]
- ⑥ 従って、最も心血管疾患の放射線リスクが高いのは、初めの1年間にチェルノブイリ・ゾーンで働いた人で、蓄積線量は0.15Gy以上、作業期間6週未満の作業者(ERR/Gy=0.80)である。
- ⑦ [国際放射線防護委員会(ICRP)が、循環器疾患などについては「100mGyまでのリスクを判断するにはデータが十分に得られていない」（ICRP2007年勧告）として、ガンの放射線リスクのみを、低線量における「放射線防護の原則」の「正当化」に用いていることにも言及し、]この調査で得られた心血管疾患の放射線リスクは、今後の放射線防護システムを発展させる上で重要である。

[注：上記、ガンマ線の外部被ばくなので、GyはSvと同じ値と考えて差し支えない。]

図2.リクビダートルの心血管疾患リスクと被ばく線量の相関



「日本と再生」映画上映会 i n 藤井寺

久保 きよ子

私は、5月末、「新エネルギーをすすめる宝塚の会」が取り組まれた上映会で、「日本と再生」を鑑賞しました。

世界の国々が再生可能エネルギーに、真剣、かつ喜々として取り組んでいる現実！日本のエネルギー政策は、世界に取り残されてしまっている現実！大きなショックを改めて感じさせられる瞬間でした。この衝撃が、7月8日の藤井寺での上映会につながりました。(50名ぐらいを予想していましたが、100名が参加))

私は、心の中で叫んでいました。「原発・核燃料サイクル推進は、夢のエネルギー社会」だというのは大ウソだった。6年前の福島原発事故で痛い目にあった日本は、反省し、賢く対応し、今までのエネルギー政策は払拭されるだろうと思っていたのが、甘かった。原発重大事故を体験し、多くの住民が苦しめられているのに原発を維持させることなどあり得ない。だけど、原発再稼働は、当たり前のように進められ、九州の川内原発、四国の伊方原発、関西の高浜原発が動いている。また、大飯3・4号、美浜3号までも再稼働を狙う関西電力の姿勢、もうかるならば危険を顧みない企業体質に、「なんとなさけない！」と。でも嘆いてばかりではられません。なんとしても止めねばなりません。日本の政府は、再生可能エネルギーを十分に進めているかのように説明をしますが、違います。その間違いは、あくまでも原発をベースロード電源だと位置づけ、原発の再稼働、維持運転を中心としているからです。これでは、ドイツなどが取り組んでいる再生可能エネルギーへの大転換は望めないのです。まず、原発からきっぱりと手を切ることで、新たなエネルギーへの取り組みが可能となるのです。なぜなら、原発にしがみつくと勢力は、自分たちの利益、権益を護るために、再生可能エネルギーの発展を妨害する側に回ってしまうからです。

政府の3年前のエネルギー計画を見ても全体のエネルギーの22%~20%を原発でまかなうことを前提にしています。原発の維持を掲げ、その縛りで、伸び続けようとする再生可能エネルギーの芽を押さえつけているのです。

「夢のエネルギー」とした原発の役割は、もう終わったのです。これ以上動かせば、危険との同居生活が強いられ、電気消費者に原発の負担を求める仕組みが作られ、解決策が見出しえない核のゴミ問題が、延々とこれからも拮据り続けることになるのです。

明るい社会を創造できない原発社会とは、「さよなら」しなければならないのです。

そのためにも、この「日本と再生」は、私たちの問いについて、解決策を見出してくれる貴重な内容となっているように思います。

私が購読している毎日新聞でも「再生可能エネルギー」「地域分散型エネルギー」を取り上げています。きっと他の新聞でも、テレビ、ラジオ、インターネットなどからも、たくさん報道されていると思うのですが、この「日本と再生」の映画を見れば、よりはっきりと理解が深まると思っています。

私たちが行った上映会の感想文に現れているように思います。

☆☆☆☆ 参加者からの感想 ☆☆☆☆

・ 福島でこんな大きな原発事故があったにもかかわらず、まだ、原発に頼っている 日本は何を考えているのかと、日本の政治のあり方に疑問を感じます。自然エネルギーで十分電力がまかなえるし、経済も発展できるのだとわかりました。原発廃止に努力していただいている方々には感謝すると共に私も微力ですが、何か役立てるよう努力しようと思いました。

・ 非常に勉強になった。ドイツが自然発電の先進国で、日本が遅れていることを初めて知った。そのドイツが「日本は自然発電の資源国で、ドイツより先に始めるべきだった」との意見はものすごく参考になった。

・ なぜ日本の政治家は市民の望んでいる方向をみようとししないのだろう。なぜ市民はそんな政治家を選んでしまうのだろう。

・ 日常 普通に電気を使用しているのに元はどこから？と、深く考えていなかったように思っています。しかし、福島事故を 発端に原子力の怖さを今更ながら思い出させました。代わりになるエネルギー 未来

のために開発されていると知り、少し安心しました。

・各地で自然エネルギーを作り出していることを知って日本の未来も明るくなったなあと思っています。私たちの地域でも自然エネルギーを考えていけるといいなあと思いました。

・われわれ普通の主婦は、今の映画の話など、余りよくわかっていないと思う。私もわかっていなかった。唯、原発は要らないよー！くらいしか正直思っていなかった。言われるままにしていることは良くない。自分たちがもっと勉強しなければ・・・松原市でも、もっと多くの人たちはこの話を知らなければ。

・日本の遅れた現状が良く理解できた。自然エネルギー以外も国際的に遅れた認識が多い日本だが、・・・とにかく諦めず 根気よく 運動しつつ がんばっていくしかない、改めて思った。

夏の救援バザー ～熱中症一歩手前～

「田中さん！値段が高すぎますよ！！」お手伝いに来てくれた“原発の危険性を考える宝塚の会”のメンバーがのたまう。やはり欲張り過ぎか？ 値付けをしながら私も思案したが、救援バザーなんだから、1円でも多くカンパしないとアカンでしょう。なので、ご指摘を聞き流して、品物の並べ方などを工夫する。どうしてもと彼女が書き換えたモノもありましたが・・・

これは宝塚市立男女共同参画センターで8月26日フリマ出店した時の話。もう何年も、というか何十年もフリマをやっているが、百均のせいか、何でもかんでも安く！という風潮がはびこって、結構よいモノでも値段の付け方が難しい。あんなに安いと作っている人はどうなるの？と心配しながら、私も時たま百均を利用するのだから、エラそうなことは言えませんが。

さて、10時開場と同時に並んでいたお客がドッと入場。私たちのテーブルをチラ見して、どんどん次のお店に行ってしまう！！「ホラね。高すぎるから」と彼女の目が言ってるぞ。そりゃそうかもと、私も弱気になる。

少ししてからまたお客が戻ってきた。一回りしてきたみたいで、今度は品物を手に取って、値段交渉を開始。私たちのブースは入り口すぐだから、横目で見て通りすぎたのかも。

タオルや石鹸やシャンプーはサッサと売れた。食料品（缶詰やカレーとか）も「特売の値段といっしょやん」と言われて値引きしたら売れた。やはり衣類と食器がダメですね。「チェルノブイリと福島のための救援のためですから」と強調しても、ほとんどの人は、「そんなの関係ない！」って感じだ。こちらの話に引き込むのは、難しい。お年寄りで話すのを楽しみに来ている人も多いけれど、自分のことをおしゃべりしたいのね。ヘンテコリンな物に目にとめて、ありゃこりゃおしゃべりのタネにして喜んでおられる。まあ、明日は我が身か。

冷房は強になっても、人いきれでムシ暑～い。水分摂取が大事。合間にグビグビとスポーツドリンクを飲む。今年はすでに2回熱中症になったから気をつけなくては。

めぼしいモノが売れてしまって、後半はビーズアクセサリと刺繍の手提げなど手作り品を上げて、これらは主に見てもらうだけ。たまに売れると儲けものだ。

それでも1時の閉店まで少しずつ売れて、4箱持ち込んだ段ボールが、帰りは2箱になった！売り上げは1万3千円。儲かりまっか？ ボチボチでんなあ。また次も頑張るかな。

（年のせいかちょっと膝が痛くなった田中あ）

お疲れさまでした！

“原発の危険性を考える宝塚の会”からの救援カンパ、いつもながらありがとうございます！

また、藤井寺での「日本と再生」の映画上映会でもベラルーシの民芸品で救援バザーをさせていただき、売り上げは11900円となりました。本当にありがとうございました。支援金として大切に使用します。これからもご協力をよろしくお願いいたします。（会計：猪又）

《あなたはどこの国の総理ですか》

「あなたはどこの国の総理ですか、（核兵器禁止条約を批判して）あなたは私たちを見捨てるのですか」

「私たちは、今こそ我が国が、あなたが、世界の核兵器廃絶の先頭に立つべきだと思います」

8月9日、長崎平和運動センター被爆者連絡協議会の川野浩一議長は、5団体を代表して首相への要望書を手渡す時、安倍首相に問いました。

核兵器禁止条約について、もともと不賛成を決めている首相からはなんの反応もなく、参加者からは「直接訴えれば何か発言してくれると思ったが・・・」と落胆の声が聞かれました。

長年の苦しみの中で、身を挺して核兵器とヒバクの非人道性、人権侵害を国内外に訴え続け、核兵器廃絶を求める運動に取り組んできた被爆者たちに、ここまで言わせるのかと情けなく。また、世界の人々に恥ずかしく・・・、そのあと猛烈に腹が立ってきました。

《核兵器禁止条約採択歓迎！》

一か月前の7月7日、国連において、核兵器禁止条約が圧倒的賛成多数（加盟国193カ国中の124カ国参加。参加国中の1カ国反対、1カ国棄権、122カ国の賛成）で成立しました。核兵器は歴史上はじめて国際法の明文上も違法なものとなり、ニューヨーク国連本部の交渉会議は参加者の拍手に包まれました。

しかし、この会議にも採決にも、日本は参加しませんでした。

条約は前文で、「核兵器使用による被害者（ヒバクシャ）と、核兵器実験による被害を受けた人々の受け入れがたい苦痛と危害に留意し」「核兵器に関する活動が、先住民により重い（不釣り合いな）被害を及ぼしていることを認識し」と謳っています。そして第6条では「被害者支援と環境の回復」を国際人道・人権法に基づいて、「国際法や二者協定に加盟する、いかなる他の国々も例外なく義務・責務とすべき」と定めています。これらは被爆者や先住民をはじめとする核実験被害者の運動が「核兵器禁止条約」の源泉のひとつとなっていることを示しています。

唯一の被爆国と言いつつ、被爆者の思いを裏切り、国連の条約交渉会議をボイコットする安倍首相の態度は言語道断です。日本は戦争の核だけでなく、フクシマ事故による「平和」の核の被害のただ中ではないですか？

《核の廃絶は、被爆者の悲願、そして人類の悲願》

これ以上ヒバクシャをつくらせない。米露などの「核兵器保有5カ国」の核も、「核の傘」の下で核兵器国に協力する日本の政府の政策も、北朝鮮などNPT非加盟国の核もノー。条約参加国を増やし、核軍縮を進めなければなりません。私たちは、何よりも、日本政府に条約参加を求めなければなりません。そして、核兵器は一旦使用されれば、壊滅的な結末をもたらす非人道的で人権を踏みにじる兵器であること、ヒバクの被害は一旦おこると取り返しのつかない事態をまねくことをもう一度学びなおし、運動を拡げていく必要を感じました。

理不尽な状況にある核被害者の権利の確立は、核被害者を救うとともに人類すべてを救うことにつながります。被爆者の運動に学び、未来を守る、これしかない！

Y

「一番いいことは原発を無くすこと」



8月5日、広島で被爆72周年原水爆禁止世界大会・ひろば『『ヒバクを許さない集い Part18』福島の現状を学び共に考え連帯しよう！』が開かれ、飯舘村の酪農家、長谷川健一さんが「原発事故と飯舘村の展望」と題し講演をされた。

放射能による高濃度汚染の為に全村避難が続いていた飯舘村が今年3月末に帰還困難区域を除いて避難指示が解除された。その村の様子や放射能に故郷を奪われた怒り、村にしがみつく行政への怒りと命を大事にしたいという自分の思い、複雑でいろいろな思いを語られた。

・村に戻って生活しているのは高齢者ばかりで、ずーと特養に入所している人も含め340人。若いお母さんや子どもは戻らない。

・村には多額の国費が投入され、道の駅、集会施設、テニスコート、学校等「ハコモノ」がどんどんでき、マスメディアは復興が進んでいるとそんなところばかりしか報道しない。

・事故後、国や県により、飯舘村の放射能の汚染濃度は隠蔽させられ無用な被ばくをさせられた。御用学者は「安心してください。何の心配もありません」と騙し、自主避難していた人も一部帰ってきた。4月11日に「計画的避難区域」に指定され、全村避難がほぼ完了したのは7月中旬。事故後4か月間で村民は福島県ではダントツに被ばくさせられた。私が一番気にしているのは健康問題。

・国は帰還の基準を20mSv/年とし、計算方法を屋内16時間としているが、汚染されている杉の木で家を作った人もいる。とんでもないことだ。

・飯舘村の30年後に重なると思い、サマシヨール話を聞きに昨年ウクライナに行った。サマシヨールは畑を耕し山羊を飼い、その畑の周りを柵で囲い、狼除けをしていた。福島も同じで、帰ると野生動物との闘いだ。(チェルノブイリでは)30km圏内から汚染物は持ち出さないように管理されている。日本では高濃度汚染地の所も高速道路が通っている。

・「実証試験」でソバを栽培している。基準は100ベクレル/kgだが、去年は26ベクレル/kg検出された。これは風評被害ではなく実害だ。東電は放射能汚染が無くなるまですべて補償すべき。

・「謝れ、償え、返せ ふるさと飯舘村」をスローガンに「原発被害糾弾 飯舘村民救済申立団」を結成し、村民6300人中3070人の賛同を得てADR(裁判外紛争解決手続き)を申立て、怒りの声をあげている。他の行政区も含め、7割がADRに賛同している。等等

フクシマ事故により、家族や村人はバラバラになり、生業が奪われ、生活が奪われる。みんなで営々と築き上げてきた美しい村・地域社会が崩壊させられた。健康への不安も募る。これからも放射能汚染は続き、元には戻らない現実がある。先への展望も開けない。事故を起こした東電や国策として原発を推進してきた国は誰も責任をとらない。国は本来なら加害責任を認め、被害者の命と健康、生活を守り、きちんと被害者の人権を補償し、守る責任があるはずである。しかし国は人権を守るどころか支援を打ち切り、被害者を切り捨てている。いくら「ハコモノ」を作っても本当の「復興」とは結び付かない。そんな様子が長谷川さんの思いとともに伝わってきた。

一方で、また事故が起こることを前提として原発再稼働を強行している日本の現状に対して、「一番いいことは原発を無くすこと」「脱原発の声を膨らませていかなければ」と講演の最後に長谷川さんは述べられた。その言葉を改めて噛みしめながら、いったん事故が起これば取り返しのつかない現実と政府の被害者を置き去りにした「復興」を改めて突き付けられた思いだった。(いのまた)

♡♣♦♥♠♦♣♥♠♦♣♥♠♦♣♥♠♦♣お知らせ♦♣♥♠♦♣♥♠♦♣♥♠♦♣

*～自主上映とお話の集い～ (表記)

アニメーション・浪江消防団物語「無念」、お話岡洋子さん

日時：10月1日(日) 13時15分～15時

場所：弁天町 ORC200 生涯学習センター

*2017戦争はいやや！核なんかいらへん！ 反核フェスティバル

NO！チェルノブイリ NO！フクシマ

日時：10月15日(日) 10時～15時

場所：長居公園 南児童公園

主催：反核フェス実行委員会

(連絡先：06-6653-0058 実行委員会事務局)

舞台やパネル展示と各種模擬店があり。参加は無料

*原発も核燃もいらん！ 戦争いやや！ ‘17 関西集会

日時：11月11日(土) 11時30分～

場所：エルおおさか 大ホール

主催：脱原発政策実現全国ネットワーク 関西・福井ブロック

(連絡先：072-843-1980 ストップ・ザ・もんじゅ)

映画「奪われた村」と講演(小出裕章、福武公子)

チケット：一般 前売り 1000円 当日 1300円

避難者・障がい者・学生 前売り 700円 当日 1000円

カンパ・会費の納入のお願い

いつもながらのカンパと会費納入をよろしくお願いいたします。

今回は10月1日の「上映とお話の集い」の賛同にもご協力をお願いしています。

「救援関西」は皆様からのご支援とご協力のみで成り立っています。

本当に恐縮至極なのですが、なにとぞ、よろしくお願いいたします。

なお、事務手続き上、すべての方に振り込み用紙を同封させていただいています。既に振り込みを頂いた方には、どうぞ失礼をお許してください。



ニュース発行:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

連絡先:〒591-8021 堺市北区新金岡町 1-3-15-102 猪又方

Tel : 072-253-4644

e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

郵便振替:00910-2-32752

口座名:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援